対人援助学研究 2020, Vol. 9　67-80.

研究論文（Articles）

中国生まれの朝鮮族女性が日本定住を選択するまで[1)]

――言語形成期後期に来日し帰国した事例から――

市　川　章　子
（一橋大学大学院言語社会研究科 韓国学研究センター）

A Chinese-Born Korean Woman's Process of Selecting to Live in Japan —From The Case of Returning to Her Home Country in The Last Stage of Her Language Acquisition—

ICHIKAWA Akiko
(Hitotsubashi University Graduate School of Language and Society The Center for Korean Studies)

The purpose of this study is to visualise the power which affect one's selecting a place to live in, through analysing the process of a Chinese-born Korean woman's selecting to live in Japan again after returning to her home country, employing Trajectory Equifinality Approach (TEA). After conducting Historically Structured Inviting (HSI), the researcher interviewed the participant, and the collected data was analysed with TEM and TLMG. The result in this research showed the participant's life that since she could not adopt herself to Japanese educational culture, she returned to her home country where she recovered her self-esteem through her experience of being accepted by speaking Japanese. The results in this study suggested Chinese-born Koreans' positive attitudes toward their lives which tend not to be clearly recognised by Japanese people, and this fact proposed the importance to create the opportunities that the children who require Japanese-language education can receive educational supports.

本研究の目的は，中国生まれの朝鮮族女性が帰国後再来日し日本への定住を選択するまでを複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach:TEA）を用いて分析し，選択の過程に働く力を可視化することである。歴史的構造化ご招待（Historically Structured Inviting:HSI）を行った後，インタビューを行いTEM/TLMG 図を描いた。日本の学校が合わないことで帰国した中国生まれの朝鮮族女性が帰国後日本語を通じていくつかの承認体験を得ることで自信を回復する歩みを描きだした。日本社会で見えにくい存在となりがちな中国生まれの朝鮮族が前向きに生きる姿を浮き彫りにした点で示唆的であり，その経験から日本語指導が必要な児童生徒に対する学級での学びの場の再構築と言う課題を提示した。

Key Words : Chinese-born Korean, TEA（TEM, TLMG, HSI), self-esteem
キーワード：中国生まれの朝鮮族，TEA（TEM, TLMG, HSI），自信

1）本研究は，横浜国立大学教育学研究科に提出した修士論文の一部であり，日韓次世代学術フォーラム第 12 回国際学術大会に発表したものである。

1. 課題設定と研究の目的

今日，外国にルーツを持つ人びとを見ることは珍しいことではなくなった。最新の法務省の発表資料では，外国人入国者数は，前年比 353 万人増加し 2,321 万人と報告されている。国籍・地域別の新規入国者数では，韓国（491 万人）がもっとも多く，次いで中国（434 万人），台湾（390 万人）となっている（法務省，2017）。現在の日本では，定住外国人について二つの名称を用いることがある。一つは，オールドカマーといわれるグループで 1945 年以前に来日した人々である。二つ目は，ニューカマーといわれるグループで 1980 年代後半から新たに渡航した人々を指す。これらは，在日中国人，日系南米人，フィリピン人などが多数を占めている。現在では，オールドカマーの数をニューカマーが上回っていると言われている（田渕，2013）。それと同時に，日本語指導が必要な児童生徒数も増加している。日本の公立学校で教育を受ける外国人児童生徒数が増加したことを受け，政府は自治体ごとに日本語指導が必要な児童生徒向けに教員の配置や国際教室の設置などを行い環境整備に努めている。日本語指導が必要な外国人児童生徒の母語別在籍状況（人数別）は，ポルトガル語 8,340 人，中国語 6,410 人，フィリピノ語 5,153 人，スペイン語 3,576 人が上位を占めており，韓国・朝鮮語は 614 人と少数派となっている（文部科学省，2015）。昨今では，中国から日本に渡る人々は増加している。学校や地域の日本語教室では，中国語ができる人々として支援対象になることはある。一方で，中国語よりも得意な他の言語を有している事実を受け入れる学校や行政担当者が把握することは稀である。そのため，親にともない来日した子弟たちの間では問題が生じている。公立小学校や中学校に通う際に，彼ら／彼女らがもつ言語資源が教師たちに正確に受容されないことが当たり前になっている。その一つに中国の朝鮮族のグループがある。

本研究における朝鮮族とは 1949 年以降，中国で少数民族政策が実施される過程において中国東北部の朝鮮人[2)]に付与された少数民族としての名称を指す（権，2013）。本研究では一貫して，調査協力者の主体性を尊重し朝鮮族と表現する。朝鮮族は，日本の出入国統計上に明示されず，社会的に日本語の音読みを使い中国名を名乗る状況にある。彼ら／彼女らが自らを名乗らない限り，日本社会で認知される機会は少ない状況に置かれている（権，2013）。朝鮮族が日本に移動するようになったのは 1986 年以降の現象として把握されており（権，2011），留学生として来日したケースが多い。人々の人生の選択は多様であり日本に定住するものや中国への帰国，別の国への移動など人生設計は多岐に渡る。国籍については，中国籍のままで過ごすこともあれば，日本や移動先の国籍に切り替えるなど様々なケースがある（金，2015）。日本で子どもを育てる朝鮮族の親たちは，子どもを日本の公立学校に通わせることを選択するため，朝鮮語[3)]や朝鮮文化を継承させる際に困難が生じ，日本語しかできないモノリンガル化が進行していく場合がある（金，2015）。朝鮮族の生活形態には，①中国の両親や親戚の力に頼りがちで強い家族観念が残る，②次世代の使用する言語は母親または直接育てる者の影響を受けやすい，③両親が二重文化を有していても意識的に教育しない限り文化の継承が困難，④言語を通して文化を伝達することは共同体の努力がなければ実現が困難などの特徴がある（尹，2010）。朝鮮族の言語使用では，朝鮮族同士が朝鮮語をベースにした会話を行う際に，コードスイッチング[4)]が重要な役割を果たしている（権，2016）。これまで朝鮮族に関する研究は，前述した知見に加え中国国内の移動やコミュニティについて着目した高（2011）やフィールド調査をもとに文化資本をめぐる二極化や階層化に着目し朝鮮族の生活実態を示した権（2011），韓国在住の朝鮮族に聞き取りをおこないその生活実態について自分史とから

2）本研究において朝鮮人とは朝鮮半島にルーツをもつ人々を指す。

3）本研究における韓国語はソウル方言を土台とした韓国（大韓民国）における標準語を指し，朝鮮語はピョンヤン方言を土台とした北の標準語（文化語）のアクセントや言い回しが韓国語に混ざった中国東北部の朝鮮族の間で話されている言葉を指す。調査協力者は母語を朝鮮語と定義しているため「朝鮮語」という名称を用いている。朝鮮語と韓国語の区別についてほとんど変わらないと表現し母語が韓国語と話す朝鮮族もいる。朝鮮族でも朝鮮語や韓国語ができないケースもある。

4）マルチリンガル話者である人々が二言語以上の言語を同時に交差して使用する現象を指す（権，2016）。

めて詳細に示した金（2012）があるが，一人の事例を深く掘り下げ社会との関係性も示しながら内面の変容を描いたものはほとんどみあたらない。朝鮮族を対象とし複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach:TEA）を用いた研究はこれまで行われておらず，関連する研究は，中国の農村出身の中国人女性一人を対象に TEA の生涯学習研究への適用可能性について言及した豊田・相良（2016）や大学進学を希望する私費外国人留学生の進路選択プロセスを社会的方向づけに着目し明らかにした茂住（2015），中国人日本語学習者の敬語使用の研究の上川（2017）がある。

朝鮮族は，日本社会で「中国人」とひと括りに受容されることもあり，地域社会や教育機関で中国語の他に朝鮮語もできると認識されることは決して多くない。それは，日本がほぼ日本語だけで生活できてしまうことに起因する。さらに日本社会では，朝鮮半島にゆかりのある人々への差別や偏見が根強く存在している。このような環境下では，自らの出自や国籍，民族について隠し，日本社会で目立たずに生きる選択をすることもある。徐（2015）は，いじめられないように子どもの頃に朝鮮人であることを隠す場面があったという。

こうした状況では当事者視点から日本社会を捉えた研究が必要であると思われる。本研究の目的は，中国生まれの朝鮮族女性が帰国後再来日し日本への定住を選択するまでを複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いて分析し，選択の過程に働く力を可視化することである。本研究の特色は，「バイリンガル育成の立場から見た言語形成期 [5]」(中島 , 2011) を TEM 図に示し，言語形成期前期と言語形成期後期の切り替えの微妙な時期に来日した朝鮮族の女性の内面の変容を描く点にある。

5）言語形成期は，言語形成期前期（0 ～ 8 歳），言語形成期後期（9 ～ 13 歳）にわけられ，詳細は 0 ～ 2 歳（ゆりかご時代）2 ～ 4 歳（子ども部屋時代）4 ～ 6 歳（遊び友だち時代）6 ～ 8 歳（学校友だち時代前半）9 ～ 13 歳（学校友だち時代後半）である。学校友だち時代前半は母語でのコミュニケーションを通じて親との絆をつくるための重要な時期であり，学校友だち時代後半は，文化の差に対する理解や比較などもできるようになる（中島 , 2011）。

2. 研究方法

協力者の概略

中国吉林省の都市で生まれる。実父の仕事が理由で小学校三年に来日。両親，祖父母とも朝鮮族であり，両親は中国の大学を卒業し来日前まで中国で働いていた。両親とも中学校から日本語を学校で習っていたが，日本に来る頃はほとんど忘れていた。D さんは日本語未習で来日した。日本の学校が合わずに一年で帰国。その後，故郷に戻り祖父母（中国語ができない）に育てられ民族学校で学び高校までを過ごす。高校卒業後，進学を目指して来日。大学生の身分で卒業を控えている状況までを中心に聞き取った。再来日後，母親が日本人と再婚したため，家庭内言語が，朝鮮語から朝鮮語と日本語へと変化している。中国への帰国は，年に一度である。性別は女性で最終インタビュー時は 27 歳になり会社勤めをしている。調査協力者のプロファイルを表 1 に示した。

表 1 プロファイル [6]

	性別	年齢	来日理由	来日時の年齢	再来日後の帰国の頻度	職業
D	女性	27	父親の日本での就職	9 歳	短期，年に一回	会社員

2.1 研究デザイン

本研究は，「生を享けた個人がその環境の中で生命を維持し生活し人生をまっとうするために記号を取り入れつつ生きていくプロセスを描く，心理学的試み」（サトウ , 2015a）である TEA を分析方法として用いる。TEA は，ヴァルシナーの文化心理学「人間が文化に属するのではなく，文化が人間に属する」という考えかたに依拠しており，記号という概念を重視する（サトウ , 2012）。こうした特徴が D さんの内面の変容を詳細に描くのに適していると思われるため分析方法に採用した。調査開始時において筆者と協力者は初対面である。調査開始にあたり幼少期に日本語教育を受け帰国経験のある人を対象に歴史的構造化ご招待（Historically Structured Inviting:

6）年齢および職業は，最終インタビュー時のものである。

表２　インタビュー概要 [8)]

	第一回（2014.1）	第二回（2014.11）	第三回（2014.11）	第四回（2016.7）
時間	1 時間 20 分	1 時間 51 分	1 時間 15 分	40 分
インタビュー項目	半構造化面接 来日の経緯，帰国理由	半構造化面接 帰国後の生活，再来日の経緯について	半構造化面接，TEM 図の確認，ライフライン図の記入	TEM 図，記述内容，等至点，TLMG の説明と修正箇所の確認

HSI）を行った。HSI とは「自分が関心を持った現象を経験した人をお招きして話を聞く手続きのこと」（サトウ , 2017a）である。本研究では地域日本語教室の関係者を介して調査協力者を得た。面接は 4 回行い主に日本語でインタビューを進め必要に応じて中国語を使用した。本研究では，3 回目と 4 回目に TEM/TLMG 図を見てもらい結果の真正性 [7)] を担保し，「トランスビュー」（サトウ , 2015b）を目指した。調査場所は，調査協力者の希望するファミリーレストラン（1 回目）と外資系コーヒーチェーン（2 から 4 回目）で行った。半構造化面接法を採用し第 3 回目の面接時にはライフライン図の作成を依頼した。半構造化面接を進めるにあたり，調査協力者に「積極的かつ自由かつオープンに話をしてもらう」（鈴木 , 2012）ことを重視した。

インタビューの概要は，表 2 の通りである。

2.2　分析方法

分析方法に採用した TEA は，複線径路等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling:TEM），HSI，発生の三層モデル（Three Layers Model of Genesis:TLMG），以上 3 つを要素とする方法論である（サトウ , 2015a）。「複線径路・等至性モデリング」は人間の文化化の過程を記述する技法（サトウ , 2012）であり TEM 図を描く際には 1/4/9 の法則に基づき研究がデザインされることが望ましいといわれている（サトウ , 2015b）。本研究では，「個人の経験の深みをさぐることができる」（荒川・安田・サトウ , 2012）1 人をインタビュー対象とした。

ここから，TEA の基礎概念について説明する。TEA では，プロセスを描く際に非可逆的時間（Irreversible Time）を基本の考え方にしている。この考え方は作成された TEM 図にも反映されるものとなる。

等至点（Equifinality Point:EFP）は，ベルタランフィによるシステム論の「開放系（オープンシステム）は等至性を持つ」というテーゼに依拠し，TEM/TEA の根幹をなす概念である（サトウ , 2015a）。EFP に至る複数径路を描く方法が TEM であり，方法論的側面から見れば EFP とは研究者の目の付け所で研究テーマを明確にするものである（サトウ , 2015a）。

EFP の対極にある点は，両極化した等至点（Polarized EFP:P-EFP）と呼ばれ，分析を通じて意味のある P-EFP が設定できることが TEM 的な飽和となる（サトウ , 2015a）。分岐点（Bifurcation Point：BFP）とは非可逆的時間のなかで人の歩みが分岐し収束する様を BFP と EFP とこれらを結ぶいくつもの径路で描き出すことが TEM で目指される分析の基本単位である。BFP の概念は，人が歩みを進めるなかで何らかの局面において転換点が立ち上がるという未来志向的な有り様を意識化する（安田 , 2015a）。

必須通過点（Obligatory Passage Point:OPP）という概念は，もとは地政学的な概念であり，ラトゥールが科学社会学的説明に取り入れ，それが TEA（複線径路等至性アプローチ）に取り入れられた経緯をもつ。その後，TEA でも転用された。TEA における「必須」という意味は「全員が必ず」という強い意味ではなく，「多くの人が」という広い意味で考えられている。そして，必須通過点という概念は個人の多様性を制約する要因を見つけやすくする点で影響力を持つ（サトウ , 2014）。TEA における OPP は，

7）初回の聞き取り（intra-View）では，調査者の主観が強く出た聞き取りになるのに対して，3 回目の聞き取り（Trans-View）では，相互の主観が融合した形の聞き取りになると考える（サトウ , 2015b）。

8）論文の公開にあたり，D さんと筆者の間で内容の確認を行い許可を得た。時間は，IC レコーダーで録音した時間を表記した。

3つの種類が認められている。一つ目は義務教育などの法律で定められているような行為・経験で制度的必須通過点と呼ぶ。二つ目は化粧のように慣習的に行なわれる行為・経験を指す慣習的必須通過点である。三つ目は，疎開のような結果的に多くの人が行う行為・経験である結果的必須通過点である（サトウ , 2017b）。

TLMG は, TEA における「自己のモデル」であり，三つの層から構成される。中心の第3層は価値，第2層は記号，第1層は行為を意味し，第2層において促進的記号が発生すると考える。TLMG では，関連情報の内化が第2層（記号）に達し促進的記号が発生することを分岐点とよぶ（サトウ , 2015a）。調査協力者であるDさんは，祖父母も両親も朝鮮族であり来日前も来日後も社会においては言語的社会的少数派である。歴史的にみても朝鮮族の人々が居住する中国東北部の地域は，旧満州国（偽満州国とも表現される）と呼ばれ日本や日本語に対して情緒的に複雑な心情を抱えている人々も少なくない。一度は，日本の学校文化や日本語が理由で帰国を選択したDさんの内面の変容を詳細に描写するため「自己のモデル」（サトウ , 2015a）を描き出す TLMG を採用した。

本研究では，ひきこもり親の会が自助グループとして安定するまでを TEM と TLMG を用いて明らかにした廣瀬の研究を参考にした（廣瀬 , 2012）。廣瀬

表3　TEM の用語ならびに本研究における意味

用語	本研究における意味
等至点（Equifinality Point:EFP） 研究者の関心，研究テーマを明確にするもの（サトウ , 2015a）	EFP1: 日本語ができることで承認を受ける EFP2：日本で就職して家族を支える
両極化した等至点（Polarized EFP:P-EFP） EFP と対極の意味をもつ（サトウ , 2015a）	P-EFP1: 承認を受けない P-EFP2: 日本で就職しない
分岐点（Bifurcation Point：BFP） 径路の分かれ道（サトウ , 2015a）	BFP1: ジャパンドリームを夢見て父が渡日 BFP2: 中国に帰国する BFP3: 再来日し日本語学校に通う BFP4:B 大学に入学
価値変容点（Value Transformation Moment:VTM） 内面的経験が変容する時間（サトウ , 2012）	特別な能力を持つ自分を誇りに思う
社会的方向づけ（Social Direction:SD） 等至点に向かうのを阻害する力（安田 , 2015a）	両親が多忙 日本の学校文化 いじめの恐怖 母親と離れた生活 中国語への苦手意識 朝鮮語 [9]使用域の狭さ（家庭・社会）
社会的助勢（Social Guidance：SG） 等至点への歩みを後押しする力（安田 , 2015a）	母親との読書 家族一緒の生活 朝鮮語が話される地域での生活 日本語の新しい体験 朝鮮語が通じる地域での生活 日本生活が評価される 友だちが多く楽しい日々 同じ立場の人がたくさんいる環境 先生の教え 日本語を話せることの喜び
必須通過点（Obligatory Passage Point：OPP） 文化的・社会的な制約や制限がかかり，ある地点から他の地点に移動するために必然的に通らなければいけない地点（サトウ , 2017b）	父親が日本で働くために求人応募（結果的必須通過点） テストで空欄のまま提出することにストレス（慣習的必須通過点） 父方の祖父母と同居（結果的必須通過点） 先生との出会い（結果的必須通過点）

表４　本研究における三層の捉え方（TLMG）

第３層	信念・価値観レベル	朝鮮語が使えない私に対する意味づけの変容
第２層	記号レベル	日本語（外国語）で自己を肯定する
第１層	個別活動レベル	自信を取り戻すまでの道のり／様々な出来事

の研究では，TEM 図における BFP，TLMG，価値変容 点（Value Transformation Moment:VTM），EFP と調査協力者の時系列ごとの変化がわかりやすく示されているためである。廣瀬の分析方法に学びながら，インタビューをもとに作成した逐語記録を KJ 法（川喜田 , 2009）の手順を用いてカテゴリー化をおこない概念を抽出した。その後，TEM および発生の三層モデルである TLMG を用いて図示化した。

2.3　倫理的配慮

面接を始める前に，調査への協力は自由意思によるものであること，調査協力はいつでも中止できること，収集したデータは研究目的のみに使用し個人のプライバシーを侵害しないことに関して口頭説明を行い面接内容の研究使用と IC レコーダーによる録音の許可を得た。

2.4　本研究における TEM の用語と意味

TEM の用語ならびに本研究における意味を表３に，本研究における三層の捉え方を表４に記した。

3. 結果

本研究では，D さんの語りから 10 個の時期区分にわけ結果と考察を示す。時期区分は，滞在地域・家庭状況・社会言語状況などを基に分類した。全体の TEM 図作成は，廣瀬（2012）と上川（2017）を参照し TLMG は伊東（2017）を参照した。D さんの語りを基に作成した図は図１から図３に示した。なお，等至点は▭で表し，語りから実際に得られた径路は⟶で表した。また，理論的に仮定される径路は----▸で，協力者自身の語りは「　」で，筆者が命名したカテゴリー名は＜　＞でそれぞれ記入した。文中の（　）は，筆者が補足した。その他，表示のないものは社会的方向づけ▭，社会的助勢▭，促進的記号✦で示す。

図２の教育や進路の決定に影響を与えた人の第Ⅸ期では自己の変容がおきた結果，D さん本人が教育や進路の決定をおこなうようになったので D さんと表記している。「　」の D さんの語りの部分は，言いよどみや繰り返しなど，インタビューデータに忠実に表記した。わかりにくい部分は，（　）で著者が補足した。

第Ⅰ期　誕生から来日まで（朝鮮語獲得期）

D さんは，＜中国で誕生＞し小学校低学年まで過ごす。もの心ついた時から＜朝鮮語の絵本の読書を開始＞する。中国の生活は，母親に余裕があり＜母親との読書＞が毎日の楽しみだった。その頃から本を読むのが好きになり，その後習慣になった。「お母さんのおかげで子どもの時に本読むのが好きだった」夜眠る前に「（絵本を読むの）頻繁にやったからあたしが好きだったんです」次第に字が書けるようになると絵本を一緒に読んだ。＜朝鮮族の小学校に通学＞するようになると，お伽話が好きになりおじいさんとおばあさんが登場する話を好んで読んだ。その後，OPP ＜父親が日本で働くために求人応募＞し採用され来日することになった。当時，D さんの故郷の朝鮮族の間では，韓国や日本に出稼ぎに行くことが流行し，中国で働くよりも高い賃金が得られる韓国や日本に働きに出ることは珍しくなかった。「月少なくとも 30 万円くらいはもらうんですけど, 中国うちの地域の普通の平均月給だと, 当時は 2･3 万円ぐらい，5 万円いかないので全然桁が違う」状況だった。BFP1 ＜ジャパンドリーム[10] を夢見て父が渡日＞し，家族が暮らせるように生活環境を整えた。父親が来日する際，人にお金を借りたので，

9）D さんは,「朝鮮語」について故郷で話されている言葉, 祖父母や両親から継承した言葉の意味で用いているが，D さんの母親は韓国語と朝鮮語の違いはほとんどないと位置づけている。

10）当時は中国で働くよりも日本や韓国で働くほうがより高い賃金を得られた。日本に来てより高い賃金をもらい生活水準の高い暮らしを目指すことを「ジャパンドリーム」と表現した。

借金を返済し家族が住む家を借りるまで一年を要した。その後＜母親と来日＞した。

第Ⅱ期　日本生活初期（初めての日本社会・日本語・日本の学校）

Dさんは小学校三年の終わりに日本の学校生活をスタートさせた。住まいは，関東地方のN市の団地で，団地にはDさん一家の他にも外国人が大勢いて特に中国人がとても多かった＜外国人がいるコミュニティでの生活開始＞。団地では，外国人同士の交流が盛んで，週末になると集まった。「当時は，週末に皆で集まって公園で焼きそば食べたり，すごく楽しかった」父親の仕事のつながりで家族単位で遊ぶことが多かった。家の近くの公民館で8時から無料で日本語を教える活動があった。公民館ではテーブルが複数あり，Dさんの両親がひとテーブルに座り日本語教師一人と外国人が何人か集まり学習した。学校では，仲が良い友だちもできて＜順調に日本生活開始＞した。

「クラスでは二人ぐらいと仲良くて，ちょうど私の隣の家にも，中国人の家族が暮らしていて，私より一個上のお姉さんがいたんですけど，そのお姉さんと仲良かった」来日してからの読書活動は，「平仮名覚えてからは自分でそのシンデレラとかその辺の本，絵本を読んだ」。来日したことで＜家族一緒の生活＞を送れるようになった。

第Ⅲ期　日本生活中期（日本での戸惑い発生）

中国とは異なる日本の学校生活に戸惑うことが多くなる。中国の学校では，国語や算数等の学習が重視されていた。「日本の理科を中国では自然ていうんですけど，自然とか社会とかそんなに重視されていない。音楽とか美術とか小学校でもさっとやっている。大体でいいよ。日本は音楽の時間もすごい」と回想する。「先進国とそうじゃない国の経済的な地域の差でもあると思う」「どうするかわからない」日本の学校教育を受けわからなくても体験させようとする＜日本の学校文化＞に戸惑いを感じ，＜振りをして困る＞ようになる。できていてもできなくても体験させようとする教育を重視する日本の学校で恥ずかしい思いもした。

三年生の時に六年生を送る会がありピアニカでアンパンマンの演奏をした。「する振りをした。ピアニカ空気いれないで，やる振り。全然声を出さないで，あれもちょっと困っちゃった」来日前は勉強ができると褒められたが，日本に来ていきなり何もできなくなってしまった。褒められたくて算数だけは努力したが，他の科目は頑張れなかった。「算数以外はわかりづらくて，頑張ろうとしない。頑張ろうとしなかった」来日したことで＜両親が多忙＞になり父親も母親も中国にいた時のようにDさんと過ごす時間を持てなくなっていく。一緒に勉強する時間もなくなり，母親との読書の時間もなくなった。通っていた小学校の三者面談で母親と国際教室の先生と話す機会があった。Dさんが日本語を覚えることが早いと褒めて，理科や社会などの内容を理解していないことは話し合わなかった。Dさんの両親は娘が日本語が上達していることに安心して，時間が経てば他の教科もついていけると信じていた。わからない状態でOPP＜テストで空欄のまま提出することにストレス＞を感じるようになり，家庭の教育も不足した結果，勉強もできなくなり段々と＜友人関係が変化＞する。来日直後の数カ月は，外国からきた子どもということでクラス全体がDさんに興味を持ち接してくれた。時間が経つと最初ほどではなくなり，＜いじめの恐怖＞がDさんの不安を増大させた。

第Ⅳ期　日本生活後期（日本が嫌になる）

ある日＜いじめの授業を受ける＞ことになった。いじめに関するドキュメンタリーを見ていじめられたらどうしようと不安を抱いた。「余計あれが結構すごいでっかい（大きい）きっかけになって，ああいう風にはされたくないって」両親は仕事で忙しく，相談できる人がいなかった。「そのようなことが積もるとどんどん勉強が嫌になったり」勉強についていけないことで「（教室では）後ろであたしのこと言ってんのかなって思っちゃう。（クラスメイトたちは）もしかしたら何も言ってないかもしれないけど，そういう風に想像しちゃう」来日して日本語を覚えたことは嬉しかったが，クラスの日本人の子とうまく付き合えず勉強もできなくなり「それが嫌で帰りたい」とBFP2＜中国に帰国する＞ことになる。

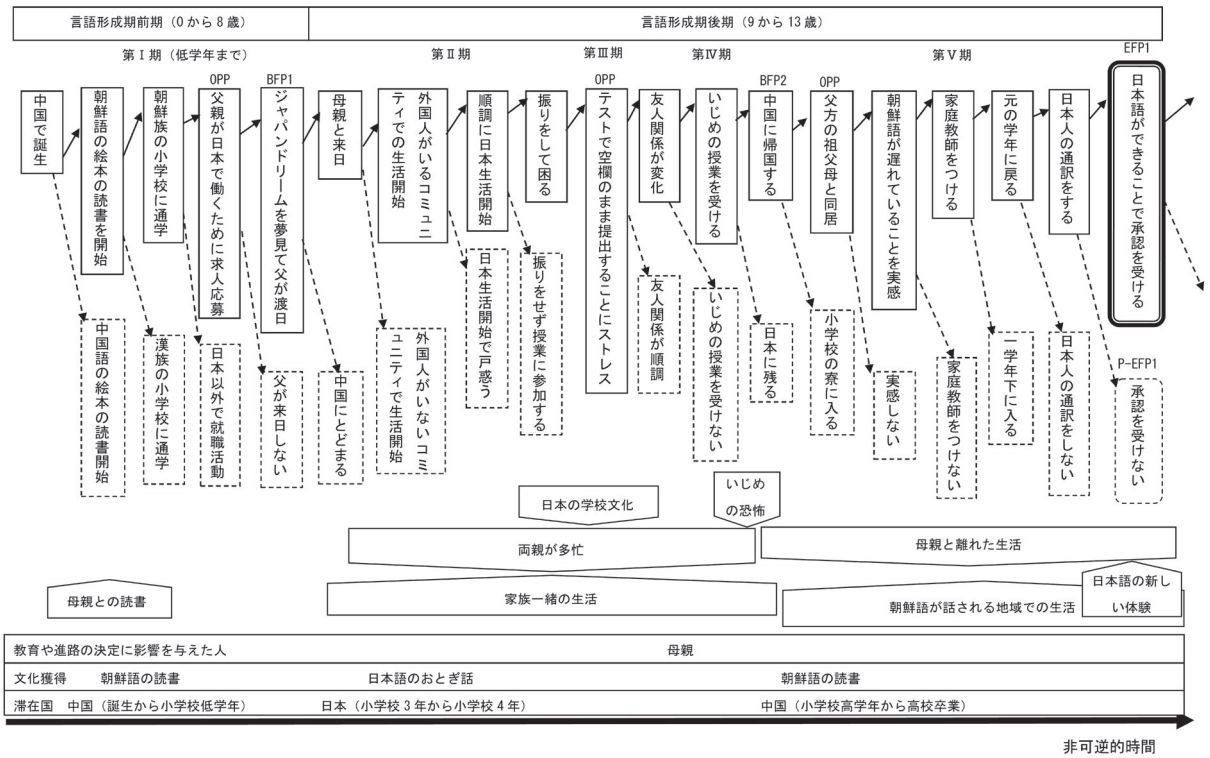

図1　DさんのTEM図1/2

第Ⅴ期　故郷へ帰国（日本語能力の承認体験と中国語能力の低下を実感）

中国に帰国したのは，200X年の1月で母親に中国まで送ってもらった。両親が日本で働き，Dさんは中国で教育の機会を持つほうが向いていると判断した。中国に帰国後は，来日前に住んでいた故郷に戻り，OPP＜父方の祖父母と同居＞した。帰国後は，勉強を頑張った。一年間の日本滞在で，＜朝鮮語が遅れていることを実感＞し，＜家庭教師をつける＞ことで二カ月間くらい集中して勉強し＜元の学年に戻る＞ことができた。「朝鮮語は子どものときから，本を読むのが好きだったので，すぐおいつく，おいつけ大丈夫だった」その後，しばらくすると親戚の集まりで＜日本人の通訳をする＞機会に恵まれる。中国に帰国してから，＜母親と離れた生活＞が始まり寂しい思いをした。一方で，＜朝鮮語が話される地域での生活＞が始まり，＜日本語の新しい体験＞を経験し第三者から認められることになる。

「小学校のときだったんですけど，日本語を使って翻訳した経験があったんですけど，すごく周りから褒められて，子どもなのに日本語ちゃんとしゃべれていいねって」日本人学生が親戚の家に泊まった時に通訳を依頼され，EFP1＜日本語ができることで承認を受ける＞。一方で，Dさんは＜中国語の勉強が嫌いになる＞。朝鮮族は民族学校で朝鮮語と中国語を学び「私たちの母語朝鮮語が一つの国語で，第二外国語みたいな感覚で中国語」があり，朝鮮語は子どもの時から本を読むのが好きだったので遅れを克服できた。徐々に＜中国語への苦手意識＞が芽生えていく。

第Ⅵ期　中学入学（母の帰国と猛勉強）

中学に入学した後，＜日本生活が評価される＞経験をした。「中国に帰って礼儀正しいねって言われる」友人の家に電話した際に，「親が出た時に誰々さんいますかって聞くんですけど，聞き方がすごく丁寧でまず自分の名前を言って，いなかったらちゃんと失礼しますって」朝鮮語で言う。他の子にはそういう振る舞いができる子が少ない。友人が家にいない時に電話をしたことが申し訳ないと思うようになり「一言すみませんでした。失礼しましたって言うようになった」日本で学んだ習慣が，中国でも受容されるマナーとして身についていた。中学入学後も勉強中心の生活を送った。教師の家に通い勉強会を重ねた。勉強するのが楽しく，悩みがなかった。

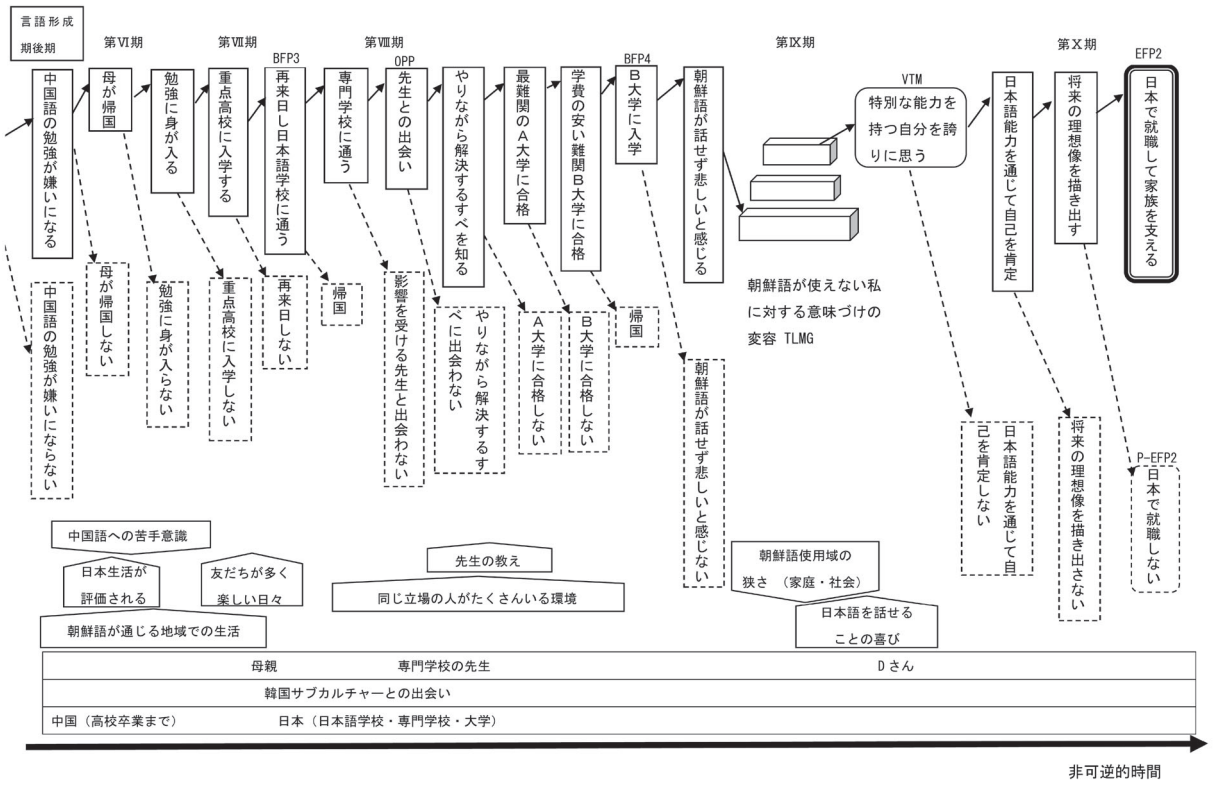

図２　Ｄさんの TEM 図 2/2

三年生になり，受験が近づくと，日本から＜母が帰国＞しＤさんを支えたことで＜勉強に身が入る＞。六年間両親と離れ祖父母に預けられていたＤさんは，母親の必要性に気付く。「みんなで頑張ったんですけど，あんまりそこまで成績良くなくて，お母さんがその時何ヶ月（か）来て一緒に勉強した。お母さんが何か教えるんじゃなくて，お母さんと一緒にやるからやりたいなっていう気持ち」と当時を振り返り，「お母さんが必要だった」と語る。

第Ⅶ期　重点高校での三年間（最後の中国生活）

高校受験に成功し，家族の期待に応え，地域で最もレベルが高い朝鮮族の＜重点高校に入学する＞。Ｄさんの家庭では，就学前教育から高校まで全てを民族学校に通うことが一族の常識となっていた。重点高校入学後は，目的がなくなってしまい勉強に身が入らない三年間だったが，＜朝鮮語が通じる地域での生活＞を送り＜友だちが多く楽しい日々＞を過ごした。「私が入った高校って地域で有名な高校で，結構いい高校入れたんですけど，そこから目的がなくなって勉強はしてなかったんですけど，すごい友だちとの仲が良くて結構幸せな毎日を，三年間，勉強はしてないけど，すごい楽しかった」小学校の時に抜けてしまった中国語能力の不足をその後埋めることができず，中国の大学への進学を断念する。

Ｄさんのような少数民族は，大学に進学する際に中国少数民族汉语水平等级考试（中国少数民族漢語能力試験：通称 MHK）[11]を受けなければならない。Ｄさんは高校三年の時点で中国語に自信がなかったため，両親の暮らす日本の大学への進学を決める。

第Ⅷ期　初めてのアルバイトと教師との出会い（再来日から専門学校まで）

家庭の事情で卒業式の一ヶ月前に来日した。スーパーでの初めてのアルバイトを経験し，生活雑貨コーナーで，レジや品出しをした。BFP3＜再来日し日本語学校に通う＞ことになり，その後，留学生向けの大学受験準備コースのある＜専門学校に通う＞。＜同じ立場の人がたくさんいる環境＞の専門

11）MHK：MHK（中国少数民族汉语水平等级考试）は，漢語（中国語）を母語としない少数民族のうち，漢語学習者を対象とした試験で，筆記試験と口述試験にわかれている（中国教育考试网 HP）。中国少数民族漢語能力試験は吉林省で統一普及されている。MHK に合格した生徒は大学受験の時『漢語文』を受ける必要がない（趙 , 2008）。

学校で，OPP＜先生との出会い＞があった。「先生は変わった方で，とにかくぶつけなさいと教えてるんです」担任教師との出会いで挑戦するようになる。わからないことをやりながら解決するという習慣がつき，「自分に自信を持ちなさいってよく言われて」＜先生の教え＞から＜やりながら解決するすべを知る＞。専門学校では，わからないことも聞くことができてよかったと話し，＜最難関のＡ大学に合格＞し＜学費の安い難関Ｂ大学に合格＞した。

第Ⅸ期　孤独を感じた大学生時代（日本の大学入学後から卒業前まで）

BFP4＜Ｂ大学に入学＞すると孤独を感じるようになる。「大学から急に一人になって，わからないけど誰に聞けばいいのか」「友だちもないし（いないし），学校の勉強にもついていけない」「大学はいい思い出があんまりなかった」アルバイトと通学に追われ，大学生活を充実したものにできなかった。サークルや団体などに属し，「自分がどっかのグループに所属して皆で何かをして遊んでもいいですし，社会のボランティア（を）してもいいですし，人と関わる経験をしたいなって思う」人との交流が持てずに「たくさんの人に会うと自分の考え方も変わるはずだし，コミュニケーション能力も上がるはず」とコミュニケーションの不足について実感する。来日したことで＜朝鮮語が話せず悲しいと感じる＞ようになる。次に，Ｄさんの朝鮮語が使えない私に対する意味づけの変容について見ていく（図３参照）。

朝鮮語が使えない私に対する意味づけの変容（TLMG）

TLMGでは，想定する３つの層間情報の内在化・外在化のプロセスにより，行動と価値，信念の様相を促進的記号の発生によって理解する試みである。第１層では，行動を捉えることができ個人活動レベルで記述される。この行動の変容を促進したのは何かという観点から，第２層の記号レベルがとらえられる。第２層において規範が獲得された場合，その結果が第３層の信念･価値観レベルで描かれる（安田，2015b）。本研究では，Ｄさんが堂々と朝鮮語を話せない状況から自分は立ち上がれると気づくまでを個別活動レベル（第１層）で描き，日本社会で朝鮮語が少数派の言語であることから日本語能力をめぐる記憶で自己を支え，促進的記号が発生する様相を記号レベル（第２層）で描く。信念･価値観レベル（第３層）では，朝鮮語を話す機会が少なく落ち込んでいる様相から現在住んでいる地域の言葉である日本語の捉え直しにより自信を回復するまでを描く。このTLMGでの変容が分岐点となり，第Ｘ期の自信回復と将来への希望へとつながる。

Ｄさんは，＜朝鮮語使用域の狭さ（家庭・社会）＞を実感する日本で，＜堂々と朝鮮語を話せない＞状況にいた。＜朝鮮語を話してもビジネスで役立たない＞＜心の奥で朝鮮語は好き＞だけれど，＜北朝鮮の訛りに近く葛藤を感じる＞。朝鮮族のなかで＜中国語が下手な自分に気づく＞ことで，＜日本社会で朝鮮語が言語少数派であることを体感＞し，＜日本で出会った朝鮮族と自己を比較＞することや＜中国語が下手なことへの葛藤＞により自信を喪失していた。＜朝鮮語は完全にできると実感＞しているが，＜韓国人の前で無理して韓国語を話す＞ことで自己を保っていた。日本社会で＜韓国語を話すことの虚無感＞を感じていたが，＜韓国語は完全にできない＞＜韓国語を話すことが恥ずかしい・自信がないと感じる＞ようになり，＜日本語（外国語）で自己の捉え直し＞が起きる。日本語をめぐる承認体験や日本での大学受験の成功を思いだし，＜日本語能力によって自信がもてると実感＞し，＜自信を取り戻す＞ことで＜自分は立ち上がれると気づく＞。＜日本語能力をめぐる記憶で自己を支える＞ことで，促進的記号＜日本語は特別な能力として残った＞が働き，＜日本語を話せることの喜び＞に支えられVTM＜特別な能力を持つ自分を誇りに思う＞に至る。

第Ｘ期　大学卒業を迎えて（自信回復と将来への希望）

Ｄさんは＜日本語能力を通じて自己を肯定＞し，＜将来の理想像を描き出す＞ようになった。初めて日本に来た時は成績の面で悩みがあり帰国した。「でも日本語はあたしの特別な能力として残った」，「中国語でいうと，この（自豪[12]）」「私の能力，自分で

12）自豪（zihao）: 自分の誇りとする。誇りに感じる。辞書では，「誇りに思う」（松岡，2012）。Ｄさんは「自豪」を発話せず紙に書いて筆者に伝えた。

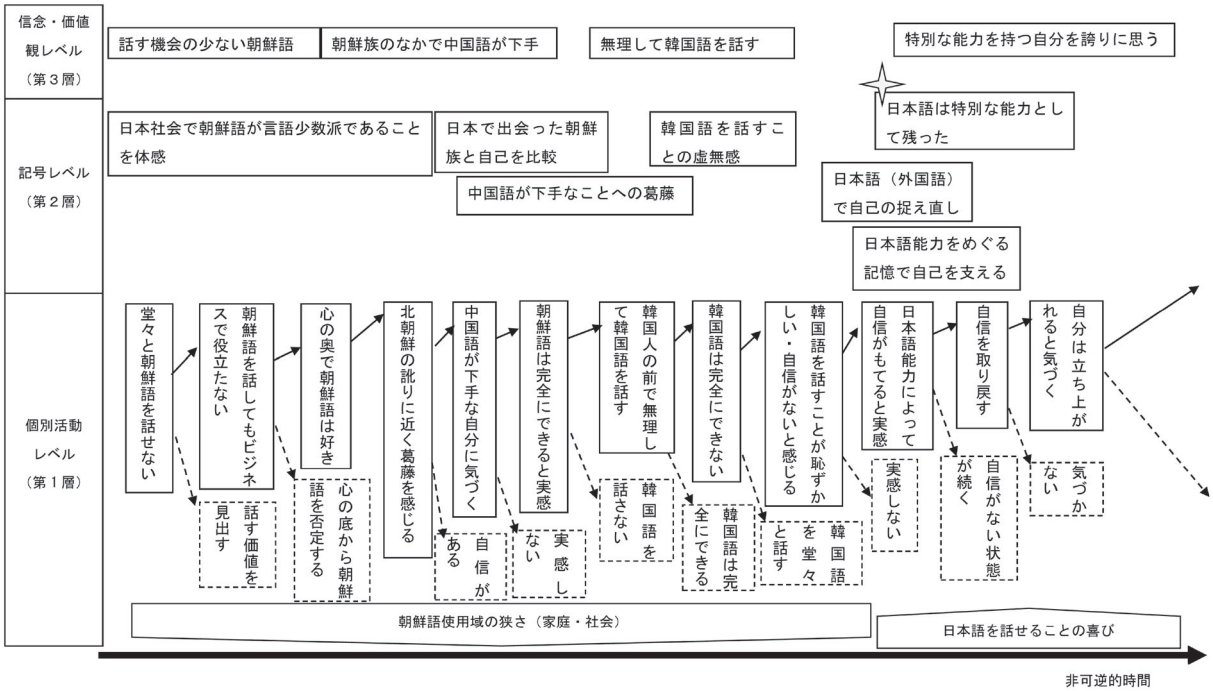

図３　D さんの TLMG 図

誇りに思う。日本語力を誇りに思ってて」「落ち込んでてもすごい自分の日本語力，会話力とかを振り返ると，やっぱり自信無くすほどじゃないなって，これから頑張ればまた立ち上がる」と自己を規定している。一方で，「日本に来ることによって嬉しいことと悩みが同時にできちゃう」と語る。

将来について「活躍したいです。どんな分野かはまだわかんないんですけど，人から憧れられるような，自分も誰かに憧れて，そういうふうになりたいって思うんですけど，逆にあたしも誰かに憧れる（憧れられる）存在になりたいなって」理想像を語り，「うちの家族は私がしっかりして豊かにする」と大学卒業後，EFP2＜日本で就職して家族を支える＞役割を自分に見出す。D さんは，日本語が話せることについて，「自分が日本語を話せることがすごく嬉しい」「自分が生まれた地域の言葉じゃなくて別の世界の言葉を話せる，その一番目の言語が日本語，だからその知らない世界の言葉を話せる自分がすごく，すごくすごい。すごい，すごいっていう言い方はあれなんですけど」「あたしよく出来たねっていう，そういうイメージ，そういう自分が嬉しい」と語った。

4. 考察

本研究では，中国で生まれ言語形成期後期に来日し中国に帰国した後，留学生として再来日した D さんの人生の径路を TEM/TLMG で図示化した。はじめに TEA の分析で得られた結果について必須通過点に着目し考察する。

中国で誕生した D さんは OPP＜父親が日本で働くために求人応募＞し，BFP1＜ジャパンドリームを夢見て父が渡日＞したことで＜母親と来日＞した。OPP＜テストで空欄のまま提出することにストレス＞を受け，その後 BFP2＜中国に帰国する＞径路を辿り，OPP＜父方の祖父母と同居＞する生活を送り EFP1＜日本語ができることで承認を受ける＞に至る。その後，BFP3＜再来日し日本語学校に通う＞径路を辿り，OPP＜先生との出会い＞BFP4＜B 大学に入学＞を経て TLMG＜朝鮮語が使えない私に対する意味づけの変容＞が生じる。そして，VTM＜特別な能力を持つ自分を誇りに思う＞という価値変容点を経て，EFP2＜日本で就職して家族を支える＞に至る。本研究では，結果的必須通過点として「父親が日本で働くために求人応募」「父方の祖父母と同居」「先生との出会い」がとらえられた。

「父親が日本で働くために求人応募」「父方の祖父母と同居」は朝鮮族の人々に留まらず中国から日本に渡る人々が通過するポイントでもある。中国人女性を対象にした豊田・相良（2016）でも父親が単身で渡日し祖父母に育てられた径路が得られており，中国から日本に渡る人々が「ほぼ必然的に通らなければいけない地点」（サトウ , 2017b）と考えられる。

「先生との出会い」では，台湾人女性が日本の中学校時代に「教師との出会い」を経験し学校生活に戻る事例（市川 , 2017）でも指摘されている。ここから，抑圧的な指導をするのではなく適切な助言をおこない次の段階へと導いてくれる教師との出会いは，日本以外にルーツを持つ人々が日本定住を続けることを可能にする経験の一つとなることが考えられる。慣習的必須通過点として得られた「テストで空欄のまま提出することにストレス」では，当時のDさんが自力で答案用紙を完成させて提出したかったことが推測できる。「小学校3年生ぐらいになると，自立心が旺盛になり，自我に目覚め，勉強にも自分なりの取り組み方をするようになる」（中島 , 2011）ため，周囲の大人が感じている以上に自分ができない状況を深刻に受けとめてしまうことが考えられる。ここから，解答時間の見直しや辞書や教科書を使い答えを導くことを許可する等の配慮の必要性が示唆された。学年相当の日本語が十分に育っていない状況の子どもに対しては，従来の日本の学校の方針に留まらない学びの場の再構築が求められるといえるだろう。

TLMG（図3）では，来日後＜中国語が下手な自分に気づく＞ことで他の朝鮮族と自己を比較し一定の距離感を感じている様子がとらえられた。加えて，韓国人留学生と出会った際に，朝鮮語ではなく韓国語を使い韓国人として振る舞う様子から，自らを低く位置づけており韓国語をエリート言語として高く位置づけていることが窺える。成長し，大学進学が可能なまでの日本語能力が獲得できたことで，一度目の来日では気づかなかった新しいマイノリティとしての自己像が浮き彫りになったといえる。

Dさんの母親は，再来日後中国語も朝鮮語も韓国語もできない日本人男性と再婚しており，現在の父親に気を遣い家庭内で朝鮮語の使用を控えている。アイデンティティやバックグランドの重要性は，自分が所属するコミュニティを離れた時に認識されやすい（舘 , 2013）ことからも，Dさんは再来日により自分の所属するコミュニティから離れたことでその重要性を改めて実感したといえるだろう。

「文化を資源として取り込みながら人は生きていく」（サトウ , 2012）というTEAの理念は，国境や境界を移動する人々に対して調査協力者の主体性が反映された深みのある新しいモデルを導き出すことを可能にし，アンケート調査から得られる知見とは異なる視座から人々が生きていくプロセスを描きだすと考えられる。本研究では第一回から第四回まで全て対面での聞き取りを行いTEM図の確認に努めている。そのため，描いたTEM図（図1/2・図2/2）では分岐点以外にも理論的に仮定されうる径路が豊富に示される結果となった。TEM図は，語り手自身にも対象化されてかえっていくものであるという（安田 , 2012）。完成したTEM図を見た際のDさんの爽快な表情からは，本研究で得られたTEM図がDさんに何らかの臨床的効果をもたらしたと思われる。

5. 結論および今後の課題

中国生まれの朝鮮族女性が帰国後再来日し日本への定住を選択するまでを複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いて分析した。選択の過程に働く力を可視化し，日本の学校が合わないことで帰国した朝鮮族女性が帰国後日本語を通じていくつかの承認体験を得ることで自信を回復する歩みを描きだした。日本社会で見えにくい存在となりがちな朝鮮族が前向きに生きる姿を浮き彫りにした点で示唆的であり，その経験から日本語指導が必要な児童生徒に対する学級での学びの場の再構築と言う課題を提示した。本研究は一名の中国生まれの朝鮮族の女性を対象にしているため，朝鮮族の傾向として一般化することは困難である。今後，より多くの調査協力者を得て本研究が朝鮮族全体さらに男性にもあてはまるのかの検証が必要である。「移動する子どもたち」のことばの力と教育について考える際に，ことばの学びと他者との関係性構築が関係する（川上 , 2011）

という議論がある。この点についても今後検討する余地が残されている。本研究では朝鮮族にとっての「日本語」という視点からの分析ができていない。インタビューでの朝鮮語の使用も検討する必要があるだろう。これらの課題については，アンケート調査に基づいた量的なアプローチと当事者の主体性が反映された質的な研究を重ねることでより詳細な検討が可能になると思われる。

謝辞

本研究に賛同しお忙しい合間を縫ってご協力くださったＤさんに心より感謝の意を表します。修士論文をご指導くださいました横浜国立大学の橋本ゆかり教授，TEA を学び続けるきっかけをくださいました立命館大学のサトウタツヤ教授，安田裕子准教授，TEA 研究会の皆様に御礼申し上げます。貴重なご意見をくださいました査読者の先生，日々ご指導くださる一橋大学のイ・ヨンスク教授はじめ言語社会研究科の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ（2012）. 複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例 . 立命館人間科学研究 , *25*, 95-107.

市川章子（2017）. 台湾人アイデンティティ再考―複線径路等至性モデリングを用いて―. 対人援助学研究 , *6*, 75-88.

伊東美智子（2017）. 第 1 節社会人経験を経た看護学生の学びほぐし 安田裕子・サトウタツヤ（編）TEM でひろがる社会実装―ライフの充実を支援する（pp.69-88）誠信書房 .

上川多恵子（2017）. 第 1 節中国人日本語学習者の敬語使用 安田裕子・サトウタツヤ（編）TEM でひろがる社会実装―ライフの充実を支援する（pp.26-48）誠信書房 .

川上郁雄（2011）.「移動する子どもたち」のことばの教育学（pp.167-168）くろしお出版 .

川喜田二郎（2009）. 発想法 創造性開発のために 84 版 中央公論新社 .

金花芬（2015）. 在日本朝鮮族の教育戦略―家庭内使用言語と学校選択を中心に―. 人間社会学研究集録 , *10*, 49-70.

金銀実（2012）. 韓国在住の中国朝鮮族を訪ねて―問題発見の旅―. 日本アジア研究 , *9*, 63-73.

権香淑（2011）. 移動する朝鮮族―エスニック･マイノリティの自己統治 彩流社 .

権香淑（2013）. 第 3 章「見えない朝鮮族」とエスニシティ論の地平 日本の新聞報道を手掛かりに 松田素二・鄭根埴（編）変容する親密圏／公共圏 4 コリアン・ディアスポラと東アジア社会（pp.77-97）京都大学学術出版会 .

権成花（2016）. 日本に居住する中国朝鮮族の言語使用―内的場面におけるコード・スイッチングの使用を中心に―. 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 , *307*, 73-94.

高鮮徽（2011）. 中国朝鮮族のグローバルな移動と韓国人，脱北者の関係 . 言語と文化 , *24*, 51-67.

サトウタツヤ（2012）. 第 4 章理論編―時間を捨象しない方法論 , あるいは , 文化心理学としての TEA 安田裕子・サトウタツヤ（編）TEM でわかる人生の径路―質的研究の新展開（pp.209-242）誠信書房 .

サトウタツヤ（2014）. 第 2 節 TEM を構成する基本概念 サトウタツヤ（編）TEM ではじめる質的研究―時間とプロセスを扱う研究をめざして 第 2 刷（pp.39-54）誠信書房 .

サトウタツヤ（2015a）.1-1 複線径路等至性アプローチ（TEA）TEM，HSI，TLMG 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ（pp.4-8）新曜社 .

サトウタツヤ（2015b）.1-5 TEM 的飽和 手順化の問題 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ（pp.24-28）新曜社 .

サトウタツヤ（2017a）. 第 1 節等至性とは何か―その理念的意義と方法論的意義 安田裕子・サトウタツヤ（編）TEM でひろがる社会実装―ライフの充実を支援する（pp.1-11）誠信書房 .

サトウタツヤ（2017b）. 第 5 章 TEA は文化をどのようにあつかうか―必須通過点との関連で 安田裕子・サトウタツヤ（編）TEM でひろがる社会実装―ライフの充実を支援する（pp.208―219）誠信書房 .

茂住和世（2015）.3―2 グローバリゼーションと進路選択 大学進学を希望する私費外国人留学生の進路選択プロセス 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）TEA 実践編複線径路等至性アプローチを活用する（pp.132-137）新曜社 .

鈴木淳子（2012）. 調査的面接の技法 [第 2 版] 第 6 刷 ナカニシヤ出版 .

徐京植（2015）. 在日朝鮮人ってどんなひと？ [初版第 3 刷] 平凡社 .

舘奈保子（2013）. 第 2 節 中華学校を選択した華僑保護者の教育戦略 志水宏吉・山本ベバリーアン・鍛治致・ハヤシザキカズヒコ（編）「往還する人々」の教育戦略グローバル社会を生きる家族と公教育の課題（p.41）明石書店 .

田渕五十生（2013）. 第 2 章 日本の外国人の抱える問題 加賀美常美代（編）多文化共生論 多様性理解のためのヒントとレッスン（pp.32-51）明石書店 .

中国教育考试网「中国少数民族汉语水平等级考试」〈http://mhk.neea.edu.cn/html1/folder/15073/13-1.htm〉（2019 年 8 月 11 日）

趙貴花（2008）. グローバル化時代の少数民族教育の実態とその変容―中国朝鮮族の事例―. 東京大学大学院教育学研究科紀要 , *47*, 177-187.

豊田香・相良好美（2016）. 複線径路等至性アプローチ（TEA）の生涯学習研究への適用可能性 日本社会教育学会年報編集委員会（編）〈日本の社会教育第 60 集〉社会教育研究における方法論（pp.174-186）東洋館出版社 .

中島和子（2011）. バイリンガル教育の方法増補改訂版 12 歳までに親と教師ができること 第 5 刷（pp.23-27）アルク .

廣瀬眞理子（2012）.1-2 ひきこもり親の会が自助グループとして安定するまで 安田裕子・サトウタツヤ（編）TEM でわかる人生の径路―質的研究の新展開（pp.71-87）誠信書房 .

法務省（2017）平成 28 年における外国人入国者数及び日本人出国者数等について（確定値）（平成 29 年 3 月 3 日）〈http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00064.html〉（2019 年 8 月 11 日）

松岡榮志（2012）. クラウン中日辞典 小型版第 8 刷（p.1485）三省堂 .

文部科学省（2015）「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成 26 年度）」の結果について（平成 27 年 4 月 24 日）〈http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357044.htm〉（2019 年 8 月 11 日）

安田裕子（2012）. 第 2 節　臨床実践への適用可能性 安田裕子・サトウタツヤ（編）TEM でわかる人生の径路―質的研究の新展開（pp.171-178）誠信書房 .

安田裕子（2015a）.2-2 分岐点と必須通過点 諸力（SD と SG）のせめぎあい 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ（pp.35-40）新曜社 .

安田裕子（2015b）. 1-6 行動と価値・信念 発生の三層モデルで変容・維持を理解する（その 2）安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）TEA 実践編複線径路等至性アプローチを活用する（pp.33-40）新曜社 .

尹紅花（2010）. 日本国内に居住する中国朝鮮族の生活形態に関する研究 . 中国研究 , *18*, 27-41.

This work was supported by the Core University Program for Korean Studies through the Ministry of Education of the Republic of Korea and Korean Studies Promotion Service of the Academy of Korean Studies（AKS-2016-OLU-2250001）.

（2017. 6. 5　受稿）（2019. 12. 17　受理）
（ホームページ掲載　2021 年 3 月）